

## 第三章 方言區劃論

### 第一節 單語の方言區劃

#### 凡 例

方言の分布は一語ごとに違つてゐる。しかし、共通の傾向はある。この傾向を明にするには統計が一番よい。重ねて寫眞云々と言つた人があるが、それは比喩である。統計するに當つて、語形や意味の變異が甚だしくて同一語か否か疑はしいものは、二分の一として計算する。古書に見えた方言は參考のため擧げるけれども、統計からは省く。昭和の方言分布を知るのが目的だからである。伊豆諸島は獨立に研究するだけの價值があるから、今は省く。即ち、東京府又は伊豆といふ内には、伊豆諸島は含まれてゐないと知るべし。奄美諸島と沖繩縣とは、九州の部以外は、調査の範圍外に置く。記述を簡單にするために、小さな訛は無視する。例へば、アラキ、アラク、アラコは、アラクを以て代表させる。

## 關東の部

關東地方一府六縣の内、半分以上(四府縣以上)に行はれる方言を取つて、その全国的分布を調べてみる。

- 1 アラク(開墾地) 東京府以外の關東全部、山梨・長野・静岡・岩手・宮城・種子島にある。アラキバリと古書にはある。
- 2 アリンドウ(蟻) 關東(千葉以外) 山梨・静岡・岐阜・愛知・廣島・愛媛・大分にある。佐渡でアリンジ、天草でアレンジ、といふ。
- 3 アマ、アマッコ(女の賤稱) 關東全部、北陸中部地方(山梨以外) 滋賀・三重・奈良・和歌山・大阪・高知にある。東北では、山形庄内のアマツブリあるのみ。アマは尼だらう。ツブリは頭か。昔の女の兒は頭を剃つたから、この名がある。
- 4 イッケル(載せる) 關東(神奈川以外) 長野・静岡にある。ノッケルの母胎と思はれる。
- 5 イグ(行く) 關東(東京以外) 新潟・福島・山形・宮城にある。
- 6 ウナウ(耕す) 關東(東京以外) 山梨・長野・静岡・山形にある。越中では土を覆ふこと、伊勢でも播種の覆土を、かう言ふ。ウネ(畝)を働かせたものかと思ふ。

7 オット(酒の幼な言葉) 關東(群馬不明) 山梨・長野・静岡・岡山・愛媛・高知・山形・福島にある。盛岡・飛騨・近江ではオトトといふ。どちらも、酒を受ける人の詞から來たものである。

8 オッペシ。ル(折る) 關東全部・山梨・長野・新潟にある。「押し壓し折る」の訛。

9 オッカナイ(恐しい) 關東全部・山梨・長野・静岡・愛知・東北(山形以外)にある。山形縣の幼兒はオッカイ、オカイ、オケ、オコ、等、大阪府ではオッカイ、越後ではオッカと言ふ。

オッカは「おお、こわ」の訛かと思ふ。

10 オトカ(狐) 關東(東京、相模以外)にある。稻荷の字音。信州ではオトカン。

11 オコシマ(鷺) 關東全部・静岡・長野・岐阜・富山・島根・岩手・宮城・山形。

12 オトムライ(葬式) 關東全部・山梨・静岡・長野・愛知・福井・鳥取・山口・高知・大分。この言葉は標準語と認めて、方言集に記録しなかつた人もあるかも知れない。

13 オッコチル(落ちる) 關東全部・山梨・静岡・長野。

14 カマガギツチョ(かまきり) 關東(東京・神奈川以外) 静岡・福岡・大分にある。江戸にもあつた。(物類)

- 15 カガミンチョ(かまきり)茨城・埼玉・東京・神奈川・山梨・静岡。前項の子音轉道である。アルパ(油)コグミ(小麥)ツブレ(釣瓶)オブキョウ(臆病)の類。
- 16 カワボウ(皮坊、また)茨城・栃木・千葉・武蔵・相模・静岡・愛知・岩手・宮城・山形・福島。實際の發音は、カアボウ、カアボ、カボ、カアッボ、カッボ、カッボウ、カンボウ等、色々である。近松の「絶狩劍本地」のカンパウは是だらう。
- 17 ガナル(ど鳴る)關東(千葉・神奈川以外)山梨・静岡・長野・愛知・山形。
- 18 ギンヤク(磁石)茨城・栃木・群馬・千葉・神奈川・山梨・静岡・新潟・富山・石川・岐阜・愛知・福岡。「浮世風呂」二編下に「磁石の劍」とある。
- 19 グシ(椽)茨城・栃木・群馬・埼玉・長野・青森・岩手・山形・福島にある。千葉縣でオグシ、静岡縣でイグシ、ウムシといふ。
- 20 クネ(垣)關東全部・山梨・静岡・長野・越後・福島・山形・岩手。
- 21 クンノム(飲む)關東(東京以外)山梨・静岡・長野にある。長崎市で鵜飲をグノミといふ。「鼻息もむせてくん呑む新酒かな」(奴俳話)
- 22 ゲーロッパ(車前草)蛙葉の訛。蛙を半殺しにして、この葉で蔽へば生返るといふ子供の遊から来たもの。「かげろふ日記に「おほはこの神の助やなかりけむ、契りしことを思ひかへるは」とある。東北(秋田・山形以外)・關東(東京・神奈川以外)・山梨・静岡・長野・越後・愛知。
- 23 ゲーモナイ(無益)關東(東京以外)・山梨・静岡・長野・新潟にある。福島縣ではゲーナイといふ。ナイをナーといふのは福島訛。
- 24 コサ(木蔭)關東(千葉以外)・山梨・静岡・長野。
- 25 コヂュハン(間食)小書飯である。關東(東京・千葉以外)・福島・長野・愛知・鹿兒島にある。千葉・静岡二縣では、コヂヤ(小茶)といふ。
- 26 ジャンボン(彈式)ジャンは鉦の音、ボンは木魚の聲。關東(東京・神奈川以外)・長野・福島・秋田にある。駿河ではジャジャンボ。越後の幼な言葉に、死ぬことをジャンボンといふ。
- 27 モナ(見)浮世床、二編下に、「蕃南瓜と東埔寨程違ふのは、新田の兄の色戀か」とある。「伊勢物語」以来の古語。關東全部・福島・秋田・越中五ヶ山にある。昔、仙臺の山舎では夫をセナアと言った。(濱荻)
- 28 セール(入れる)岩手・秋田・福島・茨城・栃木・千葉。ヘール(群馬・埼玉)ヘル(青森)ヘレル(山形)とも。

29 タッペ(霜柱) 關東全部・山梨・靜岡にある。タチヒ、タツヒ(立氷)の訛かと思ふ。仙臺では、凍ツて鏡の様になり、子供等の滑つて遊ぶ所をタッペといふ。氷滑りはタッペスベリ。

30 ダイドコ(土間) 關東(茨城・群馬不明)・山梨・長野・島原半島。

31 ヅナイ(大きい) 曾我會稽山に「扱々づない大矢、御覽なされ景高公」、心中宵庚中に「さつても圖無し、御當地は予所か、一生の見始め」とある。浮世床二編上にヅナコイとある。關東(東京以外)・山梨・長野・福島・宮城・奈良・岡山にある。相模のヅナイは偉い、靜岡縣のヅナイは、強い、強情、壯健、悪戯者、利巧者、溫和者などの意味があると。子供の性質を言ふらしい。盛岡では子供の利口なことをヅナイと昔言ツた。

32 トボグチ(戸口) 關東全部・山梨・靜岡・福島・宮城にある。信州ではトマグチ、大和吉野郡ではトボトウ。

33 トウネ(子馬) 當年である。茨城・栃木・群馬・神奈川・山梨・靜岡・長野・福島・山形・岩手・大分・宮崎。

34 ドドメ(桑の實) 關東全部と長野縣。

35 ナセ(斜) ナソエの訛。關東(千葉以外)・山梨・靜岡・佐渡・富山・岐阜・三重・佐賀。

36 ニシ(對稱) 關東(東京以外)・山梨・岩手・宮城・山形・福島・靜岡・大分・薩摩。「碁盤本平記」常陸人の言葉に出て居る。主の訛。

37 ニシヤドチ(蝸) 關東(東京・神奈川以外)・靜岡・大阪・三重・徳島・高知・大分にある。頭をつまんで、「西アども、東アども」と聞く子供の遊から來たもの。甲府ではニシヤ、上州邑樂郡でニシヤドッコ。

38 ネーマ(苗代) ナヘマ(苗間) 又はナヘバ(苗場)の訛。關東全部・山梨・長野。

39 ハソン(修繕) 茨城・栃木・群馬・埼玉・山梨・長野・岐阜・奈良・山形にある。

40 ヒョグル(進る) 關東(相模以外)と靜岡にある。「浮世風呂」四編上に、「立居たてて小便をするに、其小便をひよぐる内、最う尖頭せんとうの方は氷りやす」とある。相模ではヒョヂルといふ。「浮世床」二編下に、「韋駄天が自ら馬に乗つて小便をひよづるやうだ」とある。

41 フダン(澤山) 關東(千葉以外)・山梨・岐阜・滋賀・秋田・山形・宮城・福島にある。靜岡縣では、ククサンと複合して、フندگانサンといふ。尾張にも、フندگانがあつた(物類)。

古語のフサニの訛だらう。

42 ボサ(藪) 關東(東京以外)・山梨・靜岡・三河・岡山にある。豊後では、ボソ、ボソロ。ガ

サ(奈良市)ゴソ(土佐)等、何れも擬容である。

43 メカイ(籠) 關東(埼玉以外)・山梨・福島にある。佐渡や岩手縣では、竹筥の様なものを書ぶ。

44 メド(穴) 關東全部・靜岡・福島。針の孔に限らない。

45 モシキ(薪) 關東(埼玉以外)・山梨・靜岡・長野・岩手にある。

46 モヤ(薪) 茨城・栃木・群馬・神奈川・山梨・靜岡・長野・岐阜・愛知・鳥根。

47 ヤッカム(羨む) 關東全部・新潟・福島にある。盛岡でヤカネル。

チク(虚言)ノメル(埋める)等は、關東四縣にあるが、關東以外に無いから、目的にかなはない。右の四十七語を縣別に統計すると、茨城四六語、栃木四六語、群馬四三語、千葉三七語、埼玉四一語、神奈川三六語、東京二六語となる。割合にすれば、茨城九割八分、栃木九割八分、群馬九割二分、千葉七割九分、埼玉八割七分、神奈川七割七分、東京五割五分となる。東京の少ないのが目立つが、それを除けば、最多の茨城縣と、最少の神奈川縣との差は二割である。これによれば、關東方言は、相互に酷似して居つて、之を細分する必要が無い事が判る。但し東京方言だけは餘程違ふ。だから、關東方言から、東京方言だけ分離する事は考慮してよい。次に、關東地方に隣する縣を調べてみると、山梨三〇語(六割四分) 靜岡三二語(六割八分) 長野二九語(六割二分) 新潟一〇・五語(二割二分) 福島十八語(三割八分)となる。東條さんの方言區劃には、山梨縣の一部、郡内地方を關東方言に入れてある。しかし、靜岡縣の方が、山梨縣よりも、僅ながら、一層關東に近い。山梨縣と靜岡縣とは、共に、關東方言に入れてよからう。問題は長野縣である。これは、東北方言の調査を終へた後に、改めて論ずる事にする。

今度は、關東地方の一縣置いて隣の縣を調べてみる。宮城一〇・五語(二割二分) 山形一三語(二割七分) 富山五・五語(一割二分) 岐阜八・五語(一割八分) 愛知一〇語(二割一分)となる。親不知・濱名湖線の兩側を較べてみると、富山縣は新潟縣の半分、愛知縣は靜岡縣の三分の一、岐阜縣は長野縣の三割に減ずる。常陸の人が長野縣に旅行して、常陸方言丸出して話したとすると、十言の内六言までは通するが、一足日本アルプスを越えて岐阜縣に入ると十言の内二言しか通せず、この時初めて、言葉に不自由を感じるといふ筋合である。國境を一つ越えただけで、類似性が七割を減ずる所は他に例が無い。即ち、長野・岐阜の國境は日本内地に於ける最大最深の方言境界線である。

關東方言の分布を九州や四國に求める事は必要があるまい。それは勞多くして、功の少ない仕事で

ある。實は、關係の薄い地方は、調査も粗瀆にしたから、この方面は餘り自信が無い。たゞ一つ注意しなければならぬ事は、關東方言にして、九州や四國にも一致があるものは、必ず、京阪起原の言葉であるといふ事である。關東方言は九州や四國まで進出する勢は無い。京阪語なら、全國に擴まる事が出来る。關東語の勢力範圍は、西は日本アルプス、濱名湖を限りとする。これ以西にあるもの(右の調査では二五語)は京阪起源と見てよい。

### 東北の部

東北六縣の内、四縣以上に分布する方言を選んで、その全國的分布を調べてみる。

- 1 アク(次) 東北全部・越後・長野・三重・土佐幡多郡にある。灰汁ではない。
- 2 アクト(踵) 東北全部・群馬・神奈川・新潟・中部地方全部にある。アクト、アクトツ、アグツと訛る所もある。中部地方ではアックイともいふ。倭名抄のアコエ(蹴爪)の系統である。
- 3 アバ(母) 東北(宮城以外)・北陸道全部・土佐幡多郡・壹岐・鹿兒島・沖繩。アッパ・アハ・アバン・アヒイ・アボ・アボ・アボン・アム・アモ・アマ・アンマ・アンマー等ともいふ。古語のオモの系統かと思ふ。

- 4 エジコ(搖籃) 藁製の籠で赤ん坊を容れるもの。東京では、赤ん坊の代りに、冬季、オハチを入れて、その名もオハチ入れと呼んでゐる。東北全部・茨城・栃木・能登。昔は梁からフゴを吊して、それに赤ん坊を容れたのである。駿河・近江でイジコ、信濃でイジコといふのは、唯のもつこの事である。

- 5 オカタ(妻) 東北(秋田以外)・茨城・栃木・佐渡・長野・山梨・静岡・富山・宮崎・鹿兒島。「書言字考」に、家婦、御方がある。慶長の長崎版口葡辭書にも、「ヲカタドノ タイハツに同じ。貴人の寡婦。或は妻を失へるトノに嫁せる女。下にて、シンバツといふ」とあるさうである。

- 6 オクチ(飲食強制) 東北全部・越後・長野。他の地方で、オシヒバチといふ。もう満腹といふ時に、亭主や家族が代るく出て来て、「もう一杯。もう一杯」と言つて責める。宴會の終などにやる。

- 7 オン・オル(折る) 東北全部・茨城・栃木・千葉・越後・長野・福井・三河・淡路・九州(佐賀宮崎以外)。押し折るの訛。オン・オル・オッチ・オル・オチ・オル・オソル・オソソル・オッキ・オル等。

- 8 オチ(次男以下) 東北(宮城以外)・茨城・群馬・千葉・神奈川・北陸道全部・長野・岐阜・

三重・京都・長崎・宮崎。長男の子から見た呼び名である。大家族制度にあつては、長男と男、叔父と甥姪とが同居するから、かういふ呼び名も起り易かつたわけである。

- 9 オベ(次女以下)東北(宮城以外)・茨城・千葉・神奈川・新潟・富山・石川・岐阜・長崎。  
10 オボコ(赤子)東北全部・栃木・群馬・山梨・徳島。土佐ではオボコ。ウツコ(生兒)の訛らう。昔は武藏にもあつた(物類)。書言字考に恍惚子をヲホコと訓じてゐる。元祿時代には、坊ちやんとか箱入娘といふ意味に使はれた。

- 11 オツチ(燈)東北全部・茨城・栃木・群馬・越後・長野。「書言字考」にヲツシとある。倭名抄にはオクシとある。オシの訛ではない。

- 12 カイナイ(弱い、悪い)體の弱いこと、品物の質の悪いこと等に言ふ。甲斐無いだらう。東北全部・栃木・千葉・越後・土佐。常陸のカンネーは心の弱きこととある。

- 13 カナ(ヒ)とかけ)東北(宮城以外)・茨城・栃木・新潟。

- 14 カンダチ(雷)東北(青森以外)・茨城・群馬・千葉・伊豆。神立である。青森・神奈川・山梨其他で多立をカンダチアツ。

- 15 キギ(杵)東北全部・關東(群馬・東京以外)・山梨・靜岡。杵木である。杵の古言はキ。

- 16 キドコロネ(うたゝ様)東北全部・茨城・栃木・千葉・埼玉・越後。相模・靜岡・美濃・伊豫・土佐でイドコロネ、豊後でイドコネ。

- 17 タニル(簀)東北六縣・越後・八丈島。クヘル、クベル、クヤス、ケルとも。

- 18 コガ(大桶)東北全部・關東(群馬・埼玉以外)・越後・長野・山梨・石川・三重・淡路・徳島にある。能登では肥桶に、豊後では肥甕に、關東では主に掘風桶にいふ。「伊呂波字類抄」

- 19 コッコ(吃り)東北全部・茨城・千葉・東京。コロ、コッコ、コッコ、コッコ、コッコ、コッコ等とも。擬聲である。安藝賀茂郡ではコゴメヒヤ。

- 20 コシ。イモ(馬鈴薯)東北(福島以外)・新潟・富山。

- 21 コシヤク(腹を立てる)東北全部・茨城・栃木・新潟。訛多し。

- 22 コチ(亭主)東北(秋田不明)・茨城・栃木・千葉・北陸道全部・長野・岐阜・靜岡・大分・宮崎・長崎・熊本。「書言字考」に「下學集」増補に御亭とある。因幡若美海岸では父をコチエサシ。

- 23 コワイ(疲れた)東北全部・關東(東京・埼玉以外)・越後・長野・靜岡・石川・三重・和歌

山・大和吉野郡・隱岐・宮崎・鹿児島。相模では痛い、石見では息が苦しい意。筋肉の硬直することをコワルといふ。それを形容詞にしたもの。

24 シガ(氷柱)東北全部と常陸にある。下野ではシガンボウ。越後では霜柱をシガ。東北(福島以外)では氷をもシガといふ。

25 シケ(びり)東北(山形・福島以外)・茨城・栃木。シッケ、シッカも、スケマ、スケッポ、スケンポ、スケケンポ、スケノコピとも。シリケツの訛かと思ふ。

26 シミル(凍る)東北全部・茨城・栃木・新潟・長野・静岡・富山・岐阜・石見にある。土佐ではシビル。昔は甲斐にもシミルがあつた(裏見談話)。上州館林町では、「シミが強し」「シミが弛んだ」等と使ふ。川越市では、夜間寒気がきびしい時、「今夜ひどくシミルなあ」と言ふ。又、凍豆腐をシミドゥフ。近松の冥途飛脚、壽の門松にシミツクがある。「伊呂波字類抄」に、凍の字をシミクリと訓じ、「字鏡集」に凍の字を、シミ、スピタリと訓じて居る。

27 ショウシ(恥しい)東北全部・群馬・千葉・新潟・長野・静岡・淡路・隠岐・土佐幡多郡にある。氣の毒の方は、分布が違ふ。

28 ショッパイ(鹽からい)東北全部・關東全部・新潟・長野・山梨・静岡。「鹽はゆす」の訛。

29 ショバリ(強情張り)青森・秋田・岩手・福島・宮城にある。佐渡ではソッバリ。「浮世床」初編上に、「此亭子が情を張ても山高きが大學だネ」。

30 スカイ(酸っぱい)東北全部・茨城・栃木・千葉・新潟・長野。江戸ではスッコイと言つた。スッパイの影響で、スッコイとなつたもの。

31 セキ(溝、小川)東北(宮城以外)・佐渡・長野・山梨・伊豆・愛知・島根にある。セギ、セング、セケ、セダ、センゲとも。越前ではセン。石見のセキデはサデとの複合。上總のセキは水門、高原半島のセキアゲ、セキグチは堰とある。

32 ソンマ(すぐ、じき)「ソソマ其處」「ソソマ來る」等と使ふ。東北(青森以外)・越後に多い。福岡市でも、ソソマンソコ(すぐ其處)といふ。仙臺ではソソママ。「其儘」の訛である。

33 タガク(持つ)東北全部・群馬・新潟・長野・富山。タアク、タガエル、タンガク、タンク、タンナク、タナク、チェンクとも。「手界く」といふ説がある。或は「手上ぐ」か。

34 タルヒ(つらら)東北(青森以外)・新潟・石川・福井・大分・佐賀・長崎・熊本。訛多く、廿九に達する。要するに、第二音がラリレロと變じ、第三音がシ、ス、キ、ビ、バ、ハ、ミ、ム、メ等と變するのである。

35 チョウス(いぢる、弄ぶ)東北全部と越後にある。からかふ(羽前・羽後・甲斐)あやす(相模、信濃)敷く(上總)は轉義。

36 ツンダリ(獨樂の一種)東北(山形以外)・佐渡・長野・山梨にある。越中五箇山でツンダリ、ツンダリ、薩摩でデグイマといふ。倭名抄下總本の都无求里、伊呂波字類抄のツムタリの訛である。

37 ドス(癩病)東北全部・北陸道全部・長野・岐阜・愛媛にある。ドウシ、ドウシン、ドウス、ドウスッポ、ドシ、ドスンボ、ドゥスとも。乞食を道心坊といふ所がある。それから來たらう。九州で癩病をコジキ(乞食)といふ事を考へ合すべし。カタタイにも、乞食と癩病と兩義ある。何れも一種の忘み言葉である。

38 トロベシ(始終、絶えず)東北全部・茨城・群馬・千葉・神奈川・新潟・長野・静岡。訛多し。  
青いのは、とろッ拍子に鞠いかこ 古川 柳  
市過ぎは錢の入る事とろつびやう 同

39 ナス(産む)東北全部・茨城・栃木・千葉・八丈島・奄美大島・沖縄にある。越後では、魚に限つて使ふと。古語である。

40 ナヂ・ウチ(どんな、どういふ)東北(青森以外)・關東(東京・埼玉以外)・新潟・長野・静岡。訛多し。京都の古語ナヂフの訛。慶長頃は江戸にもあつた。(慶長見聞集)

41 ナヂ(浮崩)青森・岩手・山形・福島・群馬・越後・長野・富山。

42 ネマル(坐る)東北(福島以外)・北陸道全部・長野・岐阜・島根にある。九州のネマルは一般に腐敗する意味だが、肥前千石・肥後南の關では、稀に、寝る意味にも使ふ。易林本節用集に、睡の字をネマルと訓じてゐる。書言字考にもあるが、この頃、京都では既に廢語であつたのである。

43 ノジ(缸)東北全部・關東(東京以外)・越後・長野・山梨・静岡。萬葉集東歌の弩目、天武紀のヌジの系統である。

44 ヒダリコギ(左ぎツちよ)秋田・岩手・宮城・福島・關東(東京以外)・越後。

45 ベコ(牛)東北全部・茨城・栃木・越後・山梨・京都・但馬。ペーコ、ベゴコ、ベッコとも。アイヌ語ベコ。子牛をベコといふ所は分布が違ふ。

46 ホロク(振る、振落す、遺失す)東北全部・茨城・栃木・越後。ホウロク、ボウロク、ホウラクとも。落ちることを、中國でホロケル(安藝・周防・石見)ボロケル(出雲・石見・隱岐・

周防)といふのは、自他の相違はあるが、關係はあらう。

47 マケル(水をこぼす)東北全部・茨城・栃木・千葉・埼玉・新潟・長野・静岡・三重・岡山・徳島。自動詞は東北ではマカル。淡路・伊豫のマケル(こぼれる)、和歌山縣のマケレル(溢れる)は、自他の相違はあるが、關係はあらう。

48 マツボイ(眩い)東北全部・關東(東京・千葉以外)・長野にある。「日<sup>まっ</sup>空い」の訛かと思ふ。

49 ママ(崖)東北(青森以外)・茨城・栃木・神奈川・新潟・長野・静岡・三河にある。昔は上總にもあつた(物類)。大和吉野郡のマブ(呼、草等の生えてゐる所)は違ふか。

50 ママナキ(吃)岩手・宮城・秋田・山形・越後にある。會津でママダキ、信州ではママヤキ。新撰字鏡に萬々奈支。

51 ムサイ(消耗し難い)「新米はむさい」などと使ふ。東北六縣・茨城・栃木・群馬・千葉・越後・石川・廣島・山口・徳島・愛媛。ムスイ、ムソイ、ムセイ、ムッサエ等とも。

52 メゴイ(可愛い)東北全部・茨城・栃木・越後・山梨・島根にある。河内でメンコ、上總でムゴイ、ムゲイ、ムギー、モゲイ、モギー。越中・能登では、小さいをメンコイといふ。萬葉集にメグシとある。

53 モチャボナン。物持ちの悪いこと、物を直ぐ無くしたり、こわしたりすること、又、さういふ人を入いふ。東北(山形以外)・越後・茨城・栃木・千葉・埼玉にある。訛多し。

54 ヤバシイ(濕つて氣持が悪い)東北獨特の言葉。ヤバナイ、ヤバツイ、ヤバチ、ヤバツとも。「疾しい」の訛との説あり。越後・越中では汚い意。

55 ワッパ(曲物)飯を入れて、辨當とするもの。東北(宮城・福島以外)・新潟・長野・富山・三重。

あわけない(消耗し易い) イツとこま(一寸の間) うるかす(水に漬けてふやかす) おがる(生長する) おく(計算する) かくち(家の裏) きかす(鑿) こうのけ(眉毛) ではる(出る) てんばた(紙鷲) ねぶかけ(居眠) はツたぎ(鱧) ばんまへ(順番) へそび(鍋墨) へら(妻が夫より年長) みたくない(醜い) ゆるくない(容易でない) よくたかり(慾張り) わからない(駄目だ) などは東北の大部分にあるが、東北以外には無い。

以上の五十五語を縣別に統計すると、岩手五五語(十割) 秋田五二語(九割五分) 福島五一語(九割三分) 山形五〇語(九割一分) 青森四八語半(八割八分) 宮城四八語(八割七分) の順となる。互

に酷似してゐる事が判る。統計には現はさなかつたが、福島縣の内、會津は東北方言の要素多く、會津以外の東半分はそれが少ない。また、岩手縣と秋田縣とは、奥羽山脈の峻険を隔てるにも拘らず、これほど善く似て居るのは意外である。青森縣の東半分は、岩手縣の大部分と共に、同じ南部藩に屬し、交通も便利であるにも拘らず、言葉はかなり違つてゐるのも意外である。地勢や藩の異同から、演繹的に方言區劃を定める事の危険を痛感する。方言區劃を定めるものは、現實の方言分布以外には無し。

次に、關東地方に於ける東北方言の要素を調べてみる。茨城三三語(六割)、栃木三〇語(五割五分)、千葉二二・五語(四割一分)、群馬一七・五語(三割二分)、神奈川十四語(二割五分)、埼玉八・五語(一割五分)、東京三語(五分)となる。東北地方の地續きである茨城や栃木に、東北方言の要素が多く、東北地方から遠い群馬や神奈川に、これが少ないのは當然であるが、東京と埼玉だけは、地理的遠近を超越して、深刻に、奥羽方言から掛け離れて居る。殊に、東京は明に島を成して居る。先に、關東方言の分布を調べた際にも、東京は特別區域であることを明にしたが、今度は一層深刻である。思ふに、太田道灌以前の武藏野には、今の常陸方言の様な言葉が行はれて居たらう。後、江戸が開かれるに及んで、畿内の商人や職人が多く江戸に移り住んだために、江戸の地にだけは京阪語

が行はれ、これが段々、武藏・甲斐・相模などに傳はつて、今日の様になつたのだらう。「浮世風呂」の用語を調べてみると、大部分は古風な京阪語である。即ち、江戸開府時代に、京阪から持ち込まれた言葉が、文化・文政頃まで、江戸で使はれてゐたのである。この二百年の間に、本家の京阪では、言葉の上に、一大變化が起つたらしいが、江戸はこの變化にあづからなかつたと見える。その結果、京阪語と江戸辯は違つたものとなつた。當時、地理的相違と認められて居た所ものは、實は時代的相違であつたのである。たとへば、慶長人を地下から掘起して、文政人と對話させた様な相違が、江戸辯と京阪語との相違である。江戸辯は京阪語を元とするものである。しかも、江戸辯の周圍に及ぼす影響は案外弱かつた。その結果、江戸は周圍から孤立した島を成して、今日に及んだわけである。

次に、北陸・東山・東海三道に於ける東北方言の要素を調べてみる。便宜のために、新潟・長野・山梨・静岡の東側四縣を東三道と呼び、富山・石川・福井・岐阜・愛知の西側五縣を西三道と呼ぶ。拵弧内は百分比。

東三道平均	二五・六(47)	西三道平均	八・六(16)
新潟	四七・〇(85)	富山	一三・五(25)

長野	二九・五(54)	岐阜	七・〇(13)
静岡	一五・〇(27)	愛知	四・〇(7)
山梨	一一・〇(20)	石川	一一・〇(20)
		福井	七・五(14)

これによれば、親不知——濱名湖線を境として、深刻な方言區劃がある事が判る。この線を一つ越えただけで、言葉の共通性が平均四分の一に激減する。つまり、長野縣人と岐阜縣人とでは四言語(ことば)して一言しか通じないわけである。愛知縣の分は、僅か四語だから、將來一二語發見されても狂ひが生ずるが、私が七十一語について調べた結果によると、静岡二、十四語、愛知十一語で、半分以下であつた。(今發表するのは之を精選したものである)先に關東方言を主題とした際にも、親不知——濱名湖線の東と西によつて、類似性が半分又は三分の一に減する事を明にしたが、今度も結果は同じである。新潟縣は東北方言の要素を八割五分含んでゐるから、東北方言區に入れてもよからう。東條さんの方言區劃にも、新潟縣の北半分、岩船・蒲原地方を東北方言區に入れてあることわつて置くが、新潟縣が東北方言に屬するといふ事は、東北方言が新潟縣に進出した事を意味するものではない。江戸辯なら、周圍に進出する力があつたらうが、東北辯には進出力は無いと思ふ。却つて、越後から出羽に

這入つた言葉は幾つか有つたらう。この場合、越後は本家で出羽は分家である。しかし、何れにしても、親類たる事實に變りはない。要するに、新潟縣も東北六縣も、古語保存地帯として、共通の條件を備へてゐる。

長野縣は問題である。東北方言に於ける長野縣の分け前は五割四分であり、關東方言に於ける長野縣の分け前は六割二分である。つまり、信州は、四割七分は東北方言に屬し、五割三分は關東方言に屬するわけである。六七分ほど、關東に分があるが、この程度の微差は、調査項目の選び方一つで、どうにでもなる。現に、私の第一回の調査では、殆ど、五分五分であつた。しかし、將來は、信州は關東方言區に屬する様になるだらう。なぜと言つて、東京辯は殖える一方であり、東北辯は減る一方であるから。だから、將來を思へば、長野縣は關東方言區に入れた方がよい。左ほ、信州が東部方言に屬することは、もはや、決して居る。長野と岐阜とを一所にする様な如何なる區劃説にも組する事はできない。さりとて、長野縣だけ獨立させる程の特色も無い。結局、この縣は、東北方言か關東方言かの何れかに屬すべき性質のものである。

樺太方言については、私が別に調査したものがある。(「文字と言語」所載、樺太方言の系統)それによれば、樺太方言は明かに東北方言の系統である。殊に、青森・秋田・岩手三縣に一番近い。北海

道方言については、未だ纏ツた報告に接しないが、やはり、樺太方言と同様であるらしい。

以上述べた結論を表にして示せば、次の様になる

東部方言〔東北方言(樺太・北海道・東北・新潟)〕  
關東方言(關東・静岡・山梨・長野)

近畿地方に於ける東北方言の要素は、全部で十六語である。内、三重縣六語、淡路三語半、後は一二語づゝである。即ち、近畿地方では、三重縣と淡路とに、一番多く古語が保存されてゐる事が判る。なほ、三重縣は、近畿要素の一番薄い縣である事を後に言ふつもりである。今度の調査では、三重縣は愛知縣の倍だけ、東北地方に近い事になつて居るが、第一回の調査では同數であつた。(各十語づゝ)

中國地方は合せて十一語、内、島根縣は六語半である。四國は合せて十二語半、内、高知縣は六語(幡多郡だけで三語)である。即ち、この地方では、島根縣と高知縣(特に幡多郡)に一番多く古語が保存されて居るわけである。

九州は合計二十六語、一縣當り平均三・八語である。之を近畿地方(三重以外)の十語、中國四國地方(島根・高知を除く)の十一語に較べれば二倍半に當る。即ち、京都以西にあつて、東北地方に一番近いのは、九州と島根、高知二縣だといふ事になる。この事實は、方言學で説明すべきである。

### 近畿の部

京都の言葉は、近い頃まで日本の標準語と認められて居たので、その勢力の及ぶ範圍が極めて廣く、全國に及ぶものも珍しくない。近畿一帯から、中國・四國・西三道地方に分布する言葉は、私の氣の注いだだけでも百語を越えるが、こゝには、近畿方言區の範圍と、西部方言區の範圍とを決定するに適當なもの六十二語を選ぶことにする。

- 1 アカン(駄目だ) 静岡・岐阜・愛知・福井・近畿全部・四國全部・鳥取にある。
- 2 アチナイ(不味) 岐阜・愛知・福井・滋賀・京都・大阪・兵庫にある。「方言字考」に無味と出てゐる。昔は江戸にもあつた。薩摩でアニコナカ。
- 3 アンヂョウ(上手に) 味善うの訛。福井・近畿全部・鳥取・香川・徳島にある。
- 4 イトサン(お嬢様) 近畿(奈良・京都以外)・四國(土佐以外)・岡山にある。山梨にもあると言つた人が一人ある。

5 イシナ(石) 山形・北陸道全部・岐阜・愛知・遠江・近畿(大阪以外)にある。近畿のイシナ

は小石に限るが、飛騨北部ではイシナ橋、イシナ白などと使ふ。京都市の老人はイシナゴといふ。

6 イカ(紙鳶) 山形・福島・新潟・富山・岐阜・近畿全部・鳥取・岡山・香川・徳島・福岡・大分にある。長崎ではイカバク。タコ(章魚)よりは鳥賊の方が形は似てゐる。

7 イカキ(雀) 愛知・近畿(三重以外)・四國(土佐以外)・岡山にある。

8 イヌル(歸る) 福井・近畿全部・中國全部・四國全部・福岡・大分・日向にある。福井・播磨・廣島は、イス、イヌル併用。奈良・和歌山・大阪・香川・徳島はイス専用。その他の地方はイヌル専用である。尾張河和町ではインデとだけ使ふらしい。

9 イラフ(弄ぶ) 石川・福井・岐阜・近畿全部・中國全部・四國全部にある。豊前・豊後では「構はん」をイロハン、肥後では「構ふな」をイラワイナといふ。尾張河和町のイゼロウは、イゼルとイロウと複合したもの。

10 ウチ(私) 女言葉である。千葉・福井・近畿(三重以外)・中國全部・四國全部・福岡・大分・長崎にある。出雲はオチと訛る。

11 オイド(尻) 富山・石川・福井・岐阜・近畿全部・中國全部・四國全部・大分にある。土佐では「はイドス」といふ。慶長の日葡辭書に「オイドは女の敬語とある。「醒醉笑」に居所とある。江戸でも使つた。

12 オムシ(味噌) 岐阜・福井・近畿全部・四國全部・岡山にある。もと女の詞であつた(海人藻芥、日葡辭書補遺) 江戸でも使つた。

13 オヤマ(娼妓) 愛知・福井・近畿(滋賀以外)・岡山・廣島・四國全部にある。土佐では藝者をいふ。

14 オーク(天秤棒) 古語アフコの訛。近畿(滋賀・京都以外)・島根・廣島・山口・四國全部・福岡・佐賀・長崎・熊本にある。福井縣では、棒を聯想したと見えてポーコといふ。

15 オトマシイ 色々の意味があるが、要するに「疎ましい」の訛に外ならぬ。長野・静岡・富山・石川・福井・岐阜・愛知・近畿(京都・和歌山以外)・岡山・廣島・四國(土佐以外)・對馬にある。

16 オトゴ(末子) 佐渡・富山・岐阜・愛知・近畿(滋賀・和歌山以外)・中國全部・四國全部・福岡・大分・長崎にある。信濃・駿河ではオトゴ。

17 オトンボ(末子) 近畿(滋賀・三重以外)・中國(鳥取以外)にある。土佐でオトンボシ、佐

賀でオトボツ。

18 カド(庭) 越後・長野・岐阜・岐阜・三重・和歌山・大阪・兵庫・中国(鳥根以外)・四国全部・熊本にある。福井のカドは戶外。京都では門前の意。

19 カタクマ(肩車) 静岡・岐阜・近畿全部・四国全部・岡山・広島・鳥根・大分にある。肩馬の干渉を受けて四音節にしたと見える。

20 カダラ(體) 新潟・静岡・岐阜・愛知・福井・近畿(滋賀以外)にある。

21 カンコクサイ(焦臭い) 静岡・岐阜・愛知・福井・近畿(和歌山以外)・鳥根にある。

22 ガサツ(粗暴) 山形・富山・石川・福井・伊豆・近畿全部・岡山にある。北陸道・奈良・和歌山ではガサとスよ。

23 キョウトイ(恐ろしい)「氣疎」の訛。福井・京都・奈良・和歌山・但馬・中国(山口以外)・香川にある。

24 グツガワルイ(都合が悪い) 近畿(三重・兵庫以外)・山陽道・四国全部・大分・宮崎にある。

25 ケッタイナ(變な) 福井・近畿(兵庫不明)・石見・香川・徳島・高知・大分にある。

26 ゲン(縁起) 縁起の倒語ギエンの訛。近畿全部・鳥取・島根・岡山・香川にある。福井ではゲ

ンクソ。

27 ゴクドウ(放蕩者) 津軽・遠江・富山・岐阜・愛知・福井・近畿全部・四国全部・福岡・大分・宮崎・熊本にある。

28 コケル(倒れる) 岐阜・愛知・福井・近畿全部・中国全部・四国全部・福岡・大分・熊本にある。

29 ゴツイ。大きい、強い、丈夫、武骨な、粗野な等、所により、色々な意味があるが、要するに、ゴツ／＼を形容詞にしたものに外ならぬ。富山・石川・福井・岐阜・近畿全部・中国(鳥根以外)・四国全部にある。陸奥ではゴツナといふ。

30 シンキクサイ。じれつたい、面倒な等、色々な意味がある。若狭・近畿(三重・和歌山以外)・石見・広島・山口・四国全部にある。

31 ジルイ(ぬかるい) 山梨・静岡・岐阜・愛知・若狭・近畿(滋賀・三重以外)・中国全部・四国全部・宮崎・大分にある。シルイと清む所もある。語源は「汁い」である。越中では、團子などの水分の多いことをジロエといふ。

32 ジョウロクム(胡坐かく) 岐阜・愛知・福井・近畿(三重・和歌山以外)・岡山にある。「かた

こと」には「じやうろくかく」とある。「丈六かく」である。

33 スカタン(當外れ)スカタン食フといふ。石川・福井・愛知・近畿全部・鳥取・香川・徳島・福岡にある。岐阜・島根・山口ではスカ食フと言ふ。岡山市のスコトン食フは、當にして居る處を知らぬ間に取りられて尻餅をつくこと。江戸では、間違といふ意味にスカタンを使つた。

34 スコイ(こすい)茨城・埼玉・山梨・静岡・愛知・福井・近畿全部・四國全部にある。大阪・徳島ではスゴイ。

35 スリビ(マッチ)摺火打の下略。岐阜・愛知・近畿(兵庫以外)・中國(山口以外)・四國(徳島以外)・大分・長崎にある。

36 センド(先日、長い間)山形・若狭・近畿全部・鳥取・四國(土佐以外)にある。岩手縣ではセンドナ。

37 センザイ(庭)福井・近畿(奈良以外)・香川にある。大垣市ではゼンサイといふ。上田市附近のセンザイは野菜畑。

38 ダンナイ(差支なし)「大事無し」の訛。富山・石川・福井・岐阜・近畿全部・鳥取・島根・岡山・香川・徳島にある。昔は越後にもあつた。(越後土産)

39 タンノウスル(満足する)近畿全部・鳥取・岡山・山口・香川・愛媛・高知にある。

40 チョンガリ(浪花節)近畿(三重・兵庫以外)・四國全部・岡山・廣島・石見にある。

41 チョウケル(おどける、ふざける)中部(山梨以外)・福井・近畿(兵庫以外)・鳥取・岡山・徳島にある。越後・長野・山梨・群馬でヂョケル。江戸でもジョウケルと言つた。

42 ツク／＼ポーン(土筆)愛知・若狭・近畿(奈良以外)・岡山・廣島・島根・香川・愛媛・福岡・大分にある。遠江はツク／＼ポーン、土佐はツギツギポーン。

43 ツモゴリ(晦日)佐渡・山梨・岐阜・愛知・若狭・近畿全部・中國全部・愛媛・福岡・島原半島にある。

44 ツロク(釣合)尾張・近畿(滋賀以外)・鳥取・香川・徳島・愛媛にある。岡山ではツロッコウ、

45 テキ(彼)石川・福井・近畿(滋賀・京都以外)にある。阿波ではテキと濁る。「梟狩剣本地」に「これ姫様方おてき様の痴話文」とある。

46 デンチ(袖無)岐阜・愛知・若狭・近畿(奈良・和歌山以外)・四國(土佐以外)・大分にある。

- 47 ナガタン(庖刀)茶刀の託。茨城・埼玉・石川・岐阜・愛知・福井・近畿全部・鳥取・徳島にある。
- 48 ナンバ(玉鬚)南蠻琴の下略。岐阜・福井・近畿(但馬はナンパンキビ)・中國(鳥取以外)・四國(土佐以外)・大分・島原半島にある。三河はナンバキビ。
- 49 ハミ(蜷)千葉・近畿(近江以外)・石見・山陽道・四國全部・大分・長崎にある。昔は筑前にもあつた。ハメ、ハビといふ所もある。
- 50 ハッサイ(お轉姿)近畿(近江以外)・岡山・廣島・香川・愛媛にある。パッサイと濁る所もある。
- 51 ハックイ(麥こがし)若狭・近畿(滋賀・三重以外)・鳥取・廣島・山口・徳島・愛媛・福岡・大分・長崎にある。

52 パッチ(股引)山形・近畿全部・中國(鳥取以外)・四國全部・長崎・鹿児島にある。

53 ヘチャ(醜婦)若狭・近畿(近江以外)・岡山・廣島にある。山梨・石川ではヘチャモクシ。

54 ボヤク(ぶつ／＼言ふ)美濃・若狭・近畿(京都不明)・香川にある。

55 ホタエル(ふぎける)福井・近畿全部・鳥取・山口・四國(愛媛以外)・大分にある。岩手・

佐渡・岐阜ではホタケ。豊前ではホタエル。天草ではホタユイ。鳥根・廣島のホタエルはうろたへる意。

56 マクレル(轉ぶ)山形・岐阜・若狭・近畿(大阪以外)・鳥根にある。薩摩ではマクイ、香川・山口ではマルゲル。志摩では、ころがす事をマケルといふ。

57 ミッチャ(痘痕)岐阜・愛知・福井・近畿全部・岡山・廣島・四國全部・大分にある。メッチャ・メッタといふ所もある。

58 ムサンコ(無暗)佐渡・岐阜・若狭・近畿全部・中國(山口以外)・香川・徳島にある。

59 モムナイ(うまくない)長野・近畿(滋賀・三重以外)・鳥根・香川にある。昔は九州にもあつた。正徳三年版の「商人職人懐日記」に、「京の人は(大阪を)川舎と呼び、唯一花氣にて取締りなく諸藝者の上手もしらず、下手もゝて嘩し、詞に片言多きは、味ないをモムナイとは、さりとはおかしき評そしり」とある。

60 ヤヤコシイ(複雑)静岡・石川・愛知・福井・近畿(奈良以外)・四國全部・廣島にある。岡山市ではアヤコシイ。

61 レンギ(摺粉水)仙臺・近畿(近江以外)・中國全部・四國全部・福岡・大分にある。佐賀で

はリェウギ、八丈島ではレンギネ。

62 ワヤ(亂雜) 津輕・静岡・富山・岐阜・愛知・福井・近畿全部・中國(山口以外)・四國全部、大分にある。悪戯のワヤクは別。

以上を縣別に統計する。先づ近畿地方。滋賀四十七語、三重五十一語、京都五十八語、奈良五十六語、和歌山五十六語、大阪六十一語、兵庫五十七語半である。滋賀縣の少ない事が目立つが、それでも調査項目の七割六分、疑無く近畿方言である事が判る。次に三道地方。福井四十四語半(七割二分)、岐阜三十二語(五割二分)、愛知二十六語半(四割三分)、静岡十五語(二割四分)、石川十一語半(二割)、富山十語半(一割七分)、新潟八語(一割三分)、長野六語(一割)、山梨五語(八分)の順となる。これで見ると、岐阜縣と長野縣とは甚しく違つたものである。つまり、この間に深い溝がある事が判る。愛知縣と静岡縣との相違はそれほど大きくはない。富山縣と新潟縣とは似たものである。福井縣は共通語七割二分を含んで、一番近畿方言に近い。これを近畿方言區に入れようとする案はもつともである。しかし、香川・徳島・岡山も、福井に劣らず、近畿方言に近いものである。

次に、中國、四國地方を調べてみる。鳥取二十九語(四割七分)、島根二十九語半(四割八分)、岡山四十一語(六割六分)、広島三十三語(五割三分)、山口二十三語(三割七分)、香川四十八語(七割七分)、徳島四十三語(七割)、愛媛三十八語(六割一分)、高知三十語(四割八分)となる。香川が一番多く、山口が一番少ない。平均して、四國の方が中國地方よりも、一割だけ近畿方言に近い。東西の比較では、岐阜縣は広島縣程度であり、愛知縣は山口縣に少しまさる程度である。つまり、近畿方言は東に延びるに遅くして、西に延びるに早かつたわけである。

次に、九州を調べてみる。大分二十一語半(三割五分)、福岡十三語半(二割二分)、長崎十五語半(一割七分)、熊本五語半、宮崎四語、佐賀三語半、鹿児島二語半の順序である。大分縣は主に、伊豫を通して、京阪語を學んだらしい。伊豫にある京阪語は大分縣にも大抵あり、伊豫に無い京阪語は必ず大分にも無い。これに反して、福岡縣は主に山口縣を通して京阪語を學んだらしい。さて、京阪語を含む割合は、愛媛に多くして、山口に少ない。これが京阪語の大分に多くして、福岡に少ない原因ではないかと思ふ。長崎縣は距離が遠いにも拘らず、割合多くの京阪語を含んで居るのは、前代に於ける唯一の開港場として、京阪との交通が繁かつたためだらう。

次に、西部方言の範圍を考へてみよう。京阪語四割以上を含むものを西部方言と認める。山口縣はこの標準に三分ほど足りないが、お情で合格させる。すると、西部方言の範圍は、中國全部・四國全

部・近畿全部・福井・岐阜・愛知となる。石川・富山二縣は二割足らずだから、西部方言の範圍外である。この二縣は一番新潟縣に似たものである。しかし、東部方言に入れる事も差支があるから、結局、中立として置く。九州は西部方言區の範圍外である事は統計上明であるが、しかし静岡・長野・新潟、或いはそれ以東の方言に較べれば、一層近畿方言に近い。殊に、大分・福岡・長崎三縣には、京阪語の勢力がかなりの程度まで延びてゐる。方言境界線としての周防灘は、瀬戸内海よりは大きい、日本アルプスよりは小さいといふ程度である。九州方言は、中國方言、四國方言に較べれば、確に特異性が大きい、その特異性は東北方言程度である。結局、日本の方言は、九州・西部・東部と三等分するのを適當と認める。

### 中國地方の部

- 1 イタシイ(苦しい、難しい) 中國全部にあつて、他には無い。語源は「痛し」のシク活用化だからと思ふ。
- 2 エンコウ(河童) 出雲・石見・廣島・山口・愛媛・高知・大分にある。河童は猿猴の化身であるといふ俗信から出た方言だらう。

- 3 ウバル(腫物が腫れて痛む) 出雲・石見・廣島でウバル、山口でオバル、伯耆ではハレルと折衷してハバルといふ。
- 4 エント(澤山) 古語イトの訛だらう。中國全部・淡路・伊豫にある。佐賀・長崎・日向では打消にばかり使ふと見えて、「さまで」「あまり」等と譯してある。和歌山ではエト。

- 5 エブ(紙札) 和歌山・出雲・石見・岡山・廣島・香川・愛媛・高知・大分にある。

- 6 オコトイイ(忙しい) 石見・岡山・廣島・山口・淡路・香川・徳島・大分にある。「御事多シ」の訛。

- 7 カガツ(摺鉢) 伯耆・出雲・石見・隱岐・廣島・山口・香川・愛媛・大分・日向にある。

- 8 クッンス(茶釜) 伯耆・山陽道・香川・愛媛・高知・熊本・播磨・奈良・茨城にある。「書言字考」に鎌子(かぎこ)、「かたこと」に「くわんそ」とあるのは京都の言葉である。「浪花聞書」にもクワンズとある。「物類稱呼」によれば、東國のクハンスは齒の無きものに弦を掛けたる釜であつた。

- 9 カマツカ(露草) 出雲・石見・岡山・廣島・愛媛にある。上佐ではカマツカ、讃岐ではカマダサといふ。「物類稱呼」には讃岐方言カマツカとある。

- 10 キンカイモ(馬鈴薯) 中國全部・香川・大分・播磨・伏見にある。キンカは禿頭の方言。

- 11 クジヲクル(小言いふ) 色々の意味があるが、語源は「公事を繰る」であらう。中國全部・香

川・愛媛・高知・淡路・日向にある。クジコネル(佐渡)クジマク(越前)クジライフ(熊本)といふ所もある。

12 ゴツウ(非常に)石見・山陽道全部・播磨にある。ゴツイ(因幡・伯耆)ゴット(出雲)ゴウツ(香川)といふ所もある。意味にも小差はある。

13 ナバル(取附く、つかまる)鳥取・出雲・石見・岡山・広島にある。

14 ナデル(掻集める)鳥取・石見・岡山・山口・若狭・淡路・香川・土佐・大分にある。

15 ナビル(簾る)石見・広島・山口・香川・徳島・土佐・福岡・大分にある。

16 ショニ(かはせみ)中國全部にある。播磨ではショーニンドリといふ。ショビなら各地にある。

17 スイリ(潜水)「水に入る」といふのを忘れて水だけを音讀して、スイイリとしたもの。三重・

和歌山・播磨・出雲・石見・山陽道全部・香川・徳島にある。訛多し。

18 ニガル(腹が痛む)「腹がニガル」と使ふ。中國全部と大分にある。

19 ニヤス(撲る)山陽道全部・徳島・土佐・大分にある。「物類稱呼」によれば佐賀にもあつた。紀伊ではニヤカス。

20 テベス(叩く)石見と山陽道全部にある。

21 ハッル(痛む)中國全部・大阪・大分にある。「枕草紙」に「胸のいみじうはしりける」とあるのが是だらう。「古今集」雜體にも「胸はしり火に心やけをり」とある。

22 ハンテル(すねる)石見・広島・山口・愛媛にある。大分・長崎ではハブツルといふ。

23 ヒツリ(はこべ)丹後・中國全部・香川・愛媛・豊前企救郡にある。「浮世鏡」にヒズル(京都)、「本草綱目啓蒙」にハンツル(若狭)がある。

24 ミテル(無くなる、盡る)中國(岡山以外)と土佐にある。三重縣では評議などの終つたことをミテタといふ。阿波では死ぬの敬語にミテルといふ。

25 ヨーズ(凧)石見・広島・山口・愛媛・大分にある。長崎ではヨーテ。

26 ヨザルヒキ(宵つぱり)石見・広島・香川にある。山口縣ではヨダルヲヒク、阿波ではヨサレ。岡山のヨザルは夜遊とある。

27 ワヨ(腋臭)石見・山陽道全部・愛媛・和歌山にある。ワイヨなら、各地にある。

以上を縣別に合計すると、広島二十六語(九割六分)石見二十五語(九割三分)山口二十四語(九割)岡山二十語(七割四分)出雲十六語半(六割一分)鳥取十四語(五割二分)の順となる。これで

見ると、出雲と鳥取は目立って少ない。だから、中國方言は、山陰道方言（石見を除く）と山陽道方言（石見を含む）と二つに分ける事が適當である。隠岐は資料が少ないので、どちらに屬するか未定である。但し、石田春昭氏によれば出雲系である。（方言誌論を見よ）

次に四國は、香川十三語（四割八分）、愛媛十一語（四割一分）、高知九語（三割三分）、徳島五語（一割八分）の順である。これで見ると、山陽道と四國とはかなり違つたものである事が判る。だから、この二つを一所にする考へ方には賛成できない。四國以外では、大分の十二語、兵庫の九語が主なるものである。

#### 四國の部

1 アツカマシイ（うるさい）四國全部にある。播磨では混雜、淡路ではソツカシイ意に使ふ。厚顔無恥の意味は無い。

2 アマル（落雷す）四國全部・播磨・岡山・出雲・大分・日向にある。語源はアマオル。

3 イガル（叫ぶ）四國全部・中國（出雲不明）・播磨にある。和歌山ではオガル。

4 オンビキ（ひき蛙）四國全部・大阪・兵庫・廣島・大分にある。

5 オワエル（追ふ）四國全部・山口・廣島・石見・隠岐・播磨・和歌山・三重・美濃・能登・佐

波にある。

6 ダイミ（胡頰子）四國全部・岡山・山口・大分・越後にある。

7 ケンド（籬）香川・徳島・愛媛・岡山・和歌山にある。加賀のケンドンは長とほし、富山のケ

ンドンは目の荒い籬で米と粳とをえり分ける等に使ふとある。

8 ケナイ（長持しない）香川・徳島・高知・廣島・山口にある。

9 ゴジヤ（間違）香川・徳島・愛媛・岡山・茨城にある。播磨のゴジヤイヒは猿談家とある。

10 コワル（腹が痛む）香川・徳島・愛媛・廣島・兵庫・岐阜にある。

11 サラ（新しいもの）四國全部・淡路・大阪・和歌山・奈良・京都・美濃・神奈川にある。志摩ではスアラといふ。

12 サッチ（強ひて、是非）香川・徳島・愛媛・鳥取・出雲・石見・岡山・兵庫・福崎にある。出雲では、サッチモッチ、又はサチモチといふ。盛岡のサッチガムリはさり無理、磐城・中村町のサッチは兎角の意。

13 ステル（紛失する）徳島・愛媛・高知・中國（鳥取以外）・淡路にある。紛失を忘れて「捨て」にしたもの。スタル、シタル、シテルと言ふ所もある。

- 14 セコイ(苦しい) 四國全部と淡路にある。
- 15 ソバエ(時雨) 香川・徳島・愛媛・山陽道全部・和歌山・兵庫・福岡・壹岐にある。「檀浦兜軍記」に「え、聞えた、狐の嫁入のをばえ雨、晴らして行かう」とある。
- 16 ダイイ(だるい) タヌイの訛である。ダルイとは別。香川・徳島・愛媛・鳥取・出雲・石見・広島・淡路にある。佐賀ではダイタカ。
- 17 クグル(咳する) 香川・徳島・兵庫・石見・広島・山口・福岡にある。愛媛・土佐・和歌山ではタギル、越前ではタゴク、「丹波通辭」にもタゴクとある。
- 18 ダイダイ(夏蜜柑) 香川・愛媛・土佐・石見・山口にある。ナツダイダイといふ所もある。
- 19 ダスイ(緩い) 四國全部と淡路にある。
- 20 ダケ(崖) 四國全部・兵庫・石見・岡山・山口・大分・日向・長崎にある。タキ、ダキといふ所もある。
- 21 タテル(立つ、自動詞) 四國全部・鳥取・淡路・和歌山・能登・富山にある。土佐ではタチルといふ。
- 22 ツベ(尻) 四國全部と山口にある。ツベ(大分) タンベ(出雲) ズンボ(伊勢) スポ(和歌山) といふ所もある。古語のツビと關係がある。
- 23 ツバエル(戯れる、騒ぐ) 中國全部と四國(香川以外)にある。奈良縣ではツバケル。古語のソバヘルと關係があらう。
- 24 ハタタ(ばつた) 四國全部と播磨にある。土佐ではハクトーといふ。
- 25 ハツ(鮎) 徳島・愛媛・土佐・大阪市・奈良にある。
- 26 ハンボ(蟻等作る時に飯を入れる盥形の道具) 四國全部と岡山にある。甲斐・美濃・播磨・鳥取・出雲・石見・広島のハンボは飯櫃、遠江のは、盥の様なもので、石臼を此中にすゑて粉がその中に落ちる様にするのである。
- 27 ヒユズル(引ずる) 四國全部・山陽道・淡路・和歌山・大分にある。
- 28 フルツク(鼻) 四國全部・山陽道全部・石見・淡路・和歌山・大阪・奈良・三重にある。上田市附近ではホロツクといふ。
- 29 ヘラロイ(校い) 四國全部にある。淡路では生意氣、大阪府では無遠慮の意、伊勢のヘラローはあつかましい意である。
- 30 ホンソ(愛兒)「大矢敷」に「軒は甲の立物の雲、奔走子が光もつよき夏の月」とある。四國

全部・中國全部・播磨・飛騨にある。和歌山のヒソゴは秘藏子との橋渡しになる。

- 31 ホンマ（本當）四國全部・廣島・兵庫・和歌山・大阪・奈良・尾張にある。甲斐のホンマクはホンマとホンクとの複合である。

- 32 マガル（邪屬する）四國全部と淡路にある。土佐ではマギルといふ。

以上を縣別に合計すると、愛媛三十一語、徳島三十一語、香川二十九語、土佐二十六語、兵庫二十四語の順となる。土佐は少し見劣りがするが、大體、四國は互によく似て、一區劃を成してゐる事が判る。そして、四國方言は兵庫、特に淡路、播磨の方言によく似てゐる。按ずるに、四國方言は、主に、二百年位前の大阪辯の移入残存したものだらう。大阪は大都會で、言葉の移り變りが烈しいから、二百年位の間に一變し、當時の言葉は、紀伊・播磨・淡路・四國などに今残る事になつたのだらう。四國方言は播磨方言に似て居るとは言へ、必ずしも、播磨を経て來たと考へる必要は無い。大阪辯が一方は播磨に行き、一方は四國に行つたと考へればよい。大阪辯の背景が無かつたら、四國人が播磨の田舎言葉を真似るはずがない。ホンソゴ（愛兒）などは、西鶴時代の大阪辯であるから、當時は近畿一帯に行はれたに違ひないが、今日、近畿では播磨に残るだけで、却つて、四國・中國に行つ

て榮えて居る。近畿地方は、言葉の移り變りの最も烈しい地方である。元祿文學に見出さぬ様な四國方言は、それ以後の新語と考へてよい。四國は、近畿に次いで新しい言語層である。たゞし、土佐殊に幡多郡には往々にして古語が残つて居る。こゝは、阿波の祖谷などと共に、交通の不便な所である。

次に、中國地方は、廣島十五（四割七分）、山口十四（四割四分）、岡山十四（四割四分）、石見十二（三割七分）、出雲七・五（二割三分）、鳥取七（二割二分）の順である。これによれば、四國と山陽道とはかなり違つたものである。海を一つ越えようと、類似が半分以下にある。山陰道は尙更違ふ。寧ろ、和歌山縣（十一語）の方が近い。次に、九州は大分五語、福岡三語で、意外なほど少い。

### 九州の部

- 1 アタダニ（俄に）九州六縣（鹿児島以外）・沖縄・出雲・石見・廣島・伊豫にある。佐賀ではアタヂ・アーニといふ。沖永良部島にもアタダニがあるが、すべて、奄美諸島は鹿児島縣に加へない事にする。

- 2 アメガタ（飴）九州七縣と出雲・伯耆にある。「浮世鏡」に中國方言とある。

- 3 ア・エル（落ちる）九州七縣・鳥取・岡山・山口・徳島にある。沖縄ではアイルン。主に、實の

落ちる事に言ふが、膿を出すことをアヤス(因幡)アヤカス(伯耆・出雲)と言ふ所もある。古語である。

4 イガ(刺)九州全部と沖縄にある。石見ではイガといふ。広島・山口では魚骨をイガといふ。「書言字考」に荆棘とある。元祿時代の京都辯である。

5 イッセン(床屋)九州六縣(日向不明)にある。土佐では髪結をいふ。

6 イガワ(井戸)九州全部・沖縄・広島にある。井川である。

7 イロク(乾く)福岡・大分・日向・熊本にある。石見・山口ではイラク。「日葡辭書」の頃は、長崎でも、「茶をイロカス」と言つたらしい。

8 オードーナ(横着な)九州全部・石見・広島・愛媛・石川にある。

9 オオル(叱る)九州(鹿児島以外)・山口・広島・出雲・愛媛・徳島にある。「香川ではオゴクといふ。オコルなら各地にある。

10 オラブ(叫ぶ)九州全部・四國全部・山陽道全部・石見・淡路にある。古語である。

11 カタシ(棒の實)豊前(福岡縣)・佐賀ではカタイシ、大分・長崎・熊本・日向・鹿児島・高知・徳島・山口・安藝・石見・淡路ではカタシといふ。奄美にはあるが、沖縄には無い。

12 カワ(井戸)昔は川の水を飲んだから、斯う言ふ。大分・長崎・熊本・鹿児島・愛媛・山口・広島・島根縣美田にある。沖縄・伊豆大島ではカト。

13 カライモ(甘藷)九州全部・沖縄・高知・愛媛・山口・広島にある。

14 カマギ(吠)九州全部・四國全部・山陽道全部にある。那覇市ではカマジ。

15 カルウ(負ふ)九州全部・高知・愛媛・山口・石見にある。越中・加賀・能登で、「捲つて」をカランダといふのは無關係か。

16 キビル(縛る)九州全部・香川・山口・広島・石見にある。高知・愛媛ではクビル。

17 クルブク(俯く)福岡・大分・長崎・熊本・愛媛・徳島・但馬にある。クルビク(佐賀)クロビ(鹿児島)クルヅク(鹿児島・岡山)クンヅク(日向)と言ふ所もある。

18 コズク(咳く)福岡・大分・佐賀・熊本・徳島・香川・岡山にある。山口・広島でコツルといふ。  
19 サルク(歩く)九州(大分以外)と土佐にある。大和吉野郡でジャルク、和歌山縣でシアルク、シヤアルク、サールク等といふ。古語シアルクの訛である。

20 サダチ(夕立)長崎・熊本・宮崎・鹿児島・高知・徳島にある。愛媛ではサダテ。

21 ス(穴)鼻ンス(鼻の穴)耳ンス(耳の穴)などいふ。九州全部と愛媛にある。

22 セカラシイ(うるさい、忙しい)九州全部・愛媛・淡路にある。「日葡辭書」補遺にも、下の語としてある。

23 ソウラ(たわし、束子)九州(肥後不明)・山口・廣島・石見・播磨にある。沖縄ではサイラ。  
24 ダレタ(疲れた)九州(長崎不明)・山口・高知・愛媛にある。訛ッてダッタといふ所もある。那覇ではダリタン。「日葡辭書」にもダルとある。

25 ツズ(唾)九州(福岡以外)・山口・石見にある。沖縄ではチチ。

26 ツプシ(膝)福岡・大分・長崎・鹿兒島・愛媛・徳島にある。沖縄ではツプス、又はツンシといふ。古語ツプシ(蹠)の轉か。

27 テボ(籠)九州(日向不明)・石見・和歌山にある。

28 トカキリ(とかけ)九州(佐賀以外)・山口にある。土佐幡多郡・駿河鹿原郡ではトカギリ、鹿兒島縣ではトカギイといふ。

29 トビシヤゴ(風仙花)トビシヤゴ(大分・日向・土佐幡多郡)トッシヤゴ(鹿兒島)トンシヤゴ(肥後)でンシヤギー(沖縄)など、皆同系語である。

30 ナガセ(梅雨)九州全部・四國全部にある。日向・鹿兒島・首里市ではナガシといふ。尾張で

は土用の頃降りつづく雨をナガセ、近江では長雨の如く降ることをナガセ、駿河では長く降る雨をナガサアといふ。

31 ナバ(葎)九州全部・沖縄・土佐・伊豫・山陽道全部・石見にある。

32 ノサン(塙へられぬ・たまらぬ)九州(大分以外)にある。香川ではノセン。

33 フイキン(布巾)福岡・大分・長崎・熊本・山口・廣島・石見にある。沖縄では、ふイーチン、甲斐ではフニキンといふ。宋音ホニキン(鉢重巾)の訛である。原義は沙門が鉢を覆ふ布である。

34 ヘコ(禪)九州全部・山口・廣島・石見にある。

35 ホケ(湯氣)九州全部・四國全部・山口・廣島・石見・播磨にある。那覇ではフキ。煙をいふ所もある。「大矢數」に「雲の通ひ路はなつ錢砲、ほけがたつ早晚ながらの雁の聲」とある。西鶴時代の大阪辯である。

36 ホタル(投る)九州全部にあると言ひたいが、福岡ではホタタリナゲル、鹿兒島ではホタウ、スイといふ。土佐・伊豫でホタル、伊勢でホッタルといふ。

37 ホトメク(駄待する)九州(日向・鹿兒島以外)と廣島にある。

38 ホメク(蒸暑い)九州(福岡以外)・岡山・若狭にある。沖縄ではフミチュンといふ。奈良では、足裏が熱くなる事をホメクといふ。

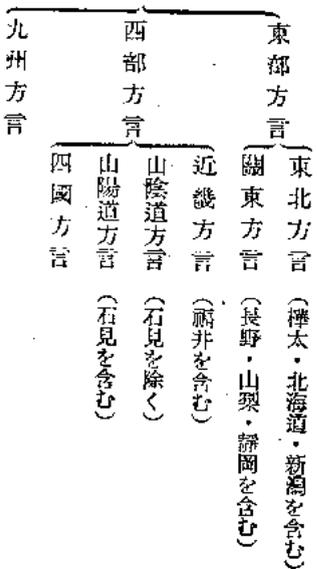
39 ホヤケ(瘧)九州全部・山口・広島にある。香川ではホーヤケ。

40 マツボリ(へそくり金)九州(鹿児島以外)・愛媛・徳島・香川・広島・岡山・鳥取・美濃にある。

以上を縣別に合計すると、福岡三四・五語、大分三七語、佐賀三三語、長崎三六語、熊本三八語、宮崎三二・五語、鹿児島三二・五語となる。これによれば、宮崎・鹿児島二縣が最も少いが、それでも調査項目の八割以上を占めてゐる。九州七縣は互によく似たもので、一團を成してゐる事が判る。但し、沖縄は僅か十五語だから、全く別である。この十五語の内、イダ(刺)ホケ(湯氣)フイキン(鉢盂巾)の三語は元祿時代の京阪語で、琉球に取つては外來語である。カライモ(甘藷)も新しいが、これはむしろ琉球の方が本家かも知れない。アイルン(落る)とツブス(膝)は古語だから、日本人と琉球人とが最初に別れた時の持參金かも知れない。その他は出來不明である。

次に、四國は愛媛二十語、高知十五語半、徳島十二語、香川九語半の順である。中國は山口二十語、広島十九語、石見十五語半、岡山七語半、出雲三語半、鳥取三語の順である。これによれば、九州方言は、東の方から、広島・山口・愛媛を通つて來た事が判るだらう。又、鳥取・出雲の九州に似ない事は意外な位である。鳥取・出雲は、古語の地帯として、九州方言と共通するものが多からうと、私は豫想して居たが、この豫想は全く裏切られた。

最後に、九州方言は獨立性が高いといふ證據として、九州の全部又は大部分にあつて、しかも九州以外に無い方言を掲げる。アド(腫)イチヂョ(一)ウシツル(棄る)オロイイ(悪い)ガラルル(叱られる)ガマダス(精出す)クウズ(石龜)コガイ(桶)コマゴト(小言)センキョウ(痘痕)クチワケ(鈍豆)タマガル(驚く)ツバ(唇)ネツム(つめる)ノスカイ(女郎)ネラル(病む)ネマル(腐る)ハッテク(逃げて行く)ハラカク(腹立つ)ヒカリモン(電)ヒカリ(會飲)ヒラクチ(蝮)フツ(蓬)ヘダロ(鍋裏)ボク(駄目)等。東北地方も獨特の方言に富むが、九州はそれ以上である。近畿・中國・四國に、獨特の方言(その地方の大部分に在つて、しかも他の地方に無いもの)が殆ど皆無であるとは、甚だしく、趣が異つて居る。又、周防灘を一つ越えようと、類似性が半減する事は前の統計で判る。これを以て見れば、九州は西部方言區から分離するのを適當と認める。即ち、日本の方言區は次の様になる。



富山・石川・岐阜・愛知・八丈島は無所屬である。この内、富山と石川はよく似たものであり、岐阜と愛知もよく似たものであるが、富山と愛知とは全く違つたもので一つに纏める事が出来ない。大體、富山・石川は新潟方言に近く(従つて東北系)、岐阜・愛知は三重方言に近い(従つて近畿系)。なほ、無所屬とは所屬不明といふ意味ではない。右の四縣の方言の性質・系統はかなりよく判つて居る。その結果、無所屬と決定したのである。この無所屬は、議會に於ける第一控室みたいなものである。單に、既成政黨に屬しないといふだけの理由で、同じ部屋に押し込められてゐる。その中には、水炭相容れない思想が同居してゐる。即ち、無所屬は政黨ではない。それと同じく、無所屬は方言區域ではな

### 各縣の特色

最後に、一縣ごとに方言の系統について述べる。

青森。青森縣は津輕藩と南部藩とより成る。この二藩は、徳富蘇峰氏の言を借りれば、ドイツとフランスの様な間柄であつた。だから、當然、言語も違つてゐるだらうと豫想されるが、事實は然らず、奥南部は岩手縣よりも、むしろ、津輕の方言に近い場合が多い。即ち今日の青森縣といふ行政區劃は方言分布上から見ても無理のないものである。さて、青森・岩手・秋田の三縣はよく似たものである。たゞし、青森縣は本州の極北に位する關係上、東北方言の代表とは認め難い點が多い。

岩手。東北方言の代表である。代表とは、東北方言の特徴を最も豊富に備へて居るものといふ意味である。

秋田。岩手縣に最も近いものである。

山形。大體、秋田縣に近いが、違ふ所も多い。海路、近畿方言の選ばれたものゝ少なからぬのが特色の一である。

宮城。福島縣(會津を除く)と共に、東北方言の要素の最も少ない縣である。さりとて、今日の關東

方言に甚だしく近いといふわけでもない。一と時代前の關東方言を多く含むものか。

福島。東半分は關東方言の影響を蒙る事最も甚だしく、従つて東北方言の特色が稀薄であるが、會津は東北方言的要素が多く、山形縣に似てゐる。

茨城。東北方言の要素も關東方言の要素も共に多い。無論、後者の要素が一層多い。栃木。茨城縣に準ずる。

群馬。關東方言の要素多く、東北方言の要素は少ない。

千葉。特色の少ない縣である。

東京。東京は東部方言に於ける島を成してゐる。さすがに、關東方言の要素は多いが、根柢を成すものは京阪語であるらしい。たゞし、現在のそれでなく、慶長・元和時代の。世人は、方言を目して得體の知れないものとするが、實は東京辯ほど得體の知れないものはない。要するに、植民地語である。

埼玉。東京に最も近い。

神奈川。その地理の示す如く、東京・山梨・静岡の中間に位する。

山梨。關東方言、特に東京辯の影響が意外に大きい。郡内地方に於て特に然りである。

静岡。神奈川・山梨と似てゐる。愛知縣とは大いに違ふ。

新潟。全く東北系である。關東要素極めて少なし。

長野。關東方言の要素と東北方言の要素とを含んでゐる。前者の方が幾らか多い。

富山。石川縣と酷似してゐるが、岐阜縣とは大分違ふ。單語から言へば、近畿系とは言ひ難い。

石川。富山縣に酷似し、福井縣・岐阜縣とは違ふ。

岐阜。愛知縣と酷似し、長野縣とは深刻に違ふ。大體、近畿方言系である。

愛知。岐阜・伊勢と酷似し、静岡とは違ふ。大體、近畿方言に近い。

福井。全く、近畿方言系である。滋賀縣に近く、石川縣に遠い。

滋賀。近畿地方の内では、一番近畿要素が少ない。

三重。近畿地方の内では、近畿要素を含む事少なく、東部方言的要素を含む事最も多い。

京都。標準語の生産地として、長い間、比類なき地位を占めて來た。今日でも、周圍に及ぼす勢力は絶大である。たゞし、大都會の言語は變り易いから、既に廢語となつたものも多い。

奈良。京都辯に對して、從屬的地位を占めるのみ。たゞし、吉野郡には、古風の言葉が残つてゐる。和歌山。東西牟婁郡・日高郡は、大和吉野郡、三重縣南北牟婁郡と共にかなり古風の言葉を残して居

る。しかし、全體として見れば、無論、近畿系を出ない。

大阪。京都に準ずる。しかし、歴史も新しく、規模も小さい。

兵庫。大阪に對して、從屬的地位を占めるのみ。

岡山。近畿方言の影響が多い。

廣島。代表的な山陽道方言である。

山口。廣島に準ずる。

島根。石見は全く山陽道方言であるが、出雲は山陽道・近畿・九州・四國の何れとも違つて居る。鳥取縣と共に、孤立した島を成して居る。遠く、東北地方と共通する語彙・語法・音韻のあるのも不思議である。山陽道や近畿や四國よりは、古いかと思はれるが、奈良朝・平安朝の古語の殆ど無いのも不思議である。出雲方言は謎である。隱岐は、石山春昭氏によれば出雲系である。(後章方言誌論を見よ)

鳥取。出雲に準ずる。

香川。大阪辯の影響を受ける事、最も濃厚である。

徳島。香川に準ずる。

愛媛。徳島に準ずる。

高知。大阪辯の影響は、四縣中で一番少ない。四國方言の要素も、他の三縣に比して少なく、多少、

孤立の傾きがある。幡多郡に、東北方言と共通するものが若干あるのは、古語の残存を思はせる。

大分。西部方言の影響は、九州中で最も多い。是は伊豫を通つて來たものらしい。

福岡。西部方言の影響が大きいが、これは山口縣を通して來たものだらう。

佐賀。九州方言の要素が割合少ない。

長崎。外來語の多いのが特色である。距離の遠いにも拘らず、近畿方言の要素の多いのは、京阪との

交通の繁かつたためだらう。しかし、代表的な九州方言ではある。かつ、外來語・近畿方言・九州

方言の三要素を含み、語彙の豊富な事、日本一である。

熊本。代表的な九州方言である。球磨郡は、交通不便な山地にあるためか、古風な言葉が多い。

鹿兒島。九州方言の要素少なく、多少、孤立の傾向がある。

宮崎。鹿兒島縣と同じ傾向がある。諸縣地方は鹿兒島縣と同じ藩であつた關係上、言語も共通である。

### 第二節 文法の方言區劃

文法の上から見ると、やはり、單語に於けると同様、親不知——濱名湖線を境として、その東と西とで著しい差のあることが判る。これを初めて證明したのは國語調査委員會の手柄である。即ち、同會の「口語法調査報告書」に曰く、

コレヲノ對峙ニ基キテ假ニ全國ノ言語區域ヲ東西ニ分クントスル時ハ大略、越中、飛騨、美濃、三河ノ東境ニ沿ヒテ其境界線ヲ引キ此線以東ヲ東部方言トシ以西ヲ西部方言トスルコトヲ得ルガ如シ  
「コレヲノ對峙」といふのを次に表にして示す。

西部	東部
受けう	受けよう
來う	來よう又ハきよう
せう	爲よう
行かぬ	行かない
行かなんだ	行かなかつた

行かいで	行かないで
行かねば	行かなければ
見よ、見い	見る
花ぢや、花や	花だ
拂うた	拂つた
讀ませた	讀ました
寒う	寒く

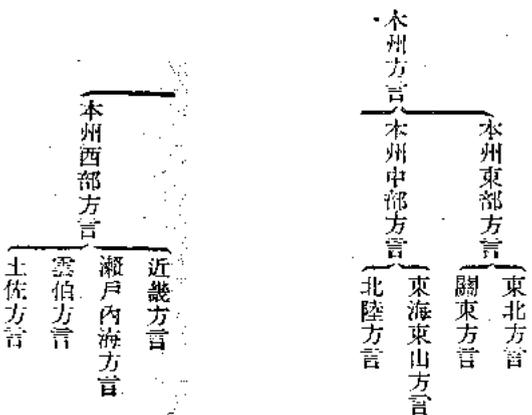
以上の例が、すべて、助動詞・動詞・形容詞等、活用ある詞である事は不思議である。助詞には是ほど見事な境界線は無い様である。

濱名湖の周圍の語法の分布については、宇波耕策氏の詳しい調査がある。その結論に曰く、濱名湖を中心にして湖東では本州東部方言に屬するものを使用し、湖西では本州西部方言に屬するものを使用し、さうして湖北では緩衝地帯として東西兩方言が交錯し兩方言を併用するといふ現象の實例はいくちも拾ふ事が出来る。「よく見える」「よう見える」「於て湖東では「よく」、湖西では「よう」、さうして湖北では兩者を併用してゐる。……」「人がゐる」「人がをる」の對立、「立つてる」「

「立つとる」の對立は略、同様であるが、「雨が降らない」「雨が降らん」の二形式に於ては「降らん」の形式は全湖畔にゆき渡り「ふらない」の形式はたゞ「ふらん」の形式に併用されて湖東地方に存するに過ぎない。中には全湖畔にわたつて東西兩形式の併用されてゐるものもある。讀ました」讀ませた」の如きは即ちその例である。上のいる、遠州方言號)

「口語法調査報告書」に、また曰く、

前項ノ境界線ハ北陸道方面ニ於テハ概シテ比較的ニ固定スルガ如クナレドモ東海道方面ニ於テハ移動スルコト頗ル多ク昆張、三河、遠江ノ如キハ屢々其所屬ヲ變ズルコトアリ又東山道方面ニ於テモ多少ノ出入アリテ南信、飛騨、美濃ノ如キハ或ハ東方ノ領域ニ入り或ハ西方ノ領域ニ入ルコトアリこの事實に基いて、東條さんの「國語の方言區劃」には、東部方言と西部方言との外に、中部方言を設けた。即ち、東條さんによれば次の様になる。



本州中部方言を設けたのは、緩衝地帯といふ以上に、積極的理由は無い様である。しかし、緩衝地帯としてならば、これは廣きに過ぎる。かやうに廣く地域を取れば、その中に、東部系と西部系と相反する二要素が含まれる事になる。かやうに氷炭相容れないものを一所にまとめるのは無理である。即ち、一の不便を除く代償として、他の不便をつけ加へた事になる。差引得る所は無い。また境界線が固定したのではなく、多少の出入のあるのは中部地方に限つた事ではあるまい。

次に、本州西部方言については、後に、アクセントを考慮に入れて、次の様に改められた。



雲伯方言についての東條さんの説明は次の通りである。

雲伯方言は西部方言中の異端者である。こゝでも「なんだ」の代りに「ざつた」が使用されたり、指定の「ぢや」の代りに「だ」が使はれたり、一般に東部方言に類した云ひ方がよく現はれる、就中、音韻に於ては「しす」「ちつ」の訛音や「ハ」行の唇音（F）の存在等、東部方言と酷似した音韻現象がある。この方言の使はれる地方は出雲及び伯耆（西伯郡）の兩國である。隠岐は石見と同系統で之とは別種である）

その外注意すべき事は東部方言中に新潟縣の岩船郡・蒲原郡が含まれてゐること、關東方言中に山梨縣の郡内地方（都留郡）が含まれてゐること、近畿方言中に福井縣の一部（木芽峠以西）が含まれてゐること、八丈島は所屬未定であること等である。

九州に對しては、東條さんの「國語の方言區劃」は非常に高い地位を與へてゐる。



これによれば、九州は舊日本を二分して、その一を保つといふ事になる。九州方言の特異性は、十分認められるが、しかし、その特異性は、本州（四國を含む）に對立させる事の出来る程、大きいものかどうかは疑問がある。東條さんが九州方言の特色として挙げたものは次の諸點である。

- (一) ジとヂ、ズとヅの區別がある。
- (二) 下二段活用は文語形に近い。
- (三) 助動詞のルル、サスルも文語形である。
- (四) 形容詞には「善か」「甘か」といふ形がある。
- (五) 打消はナンダでなく、ザッタ、ンダッタ、ンチャッタである。
- (六) 指定のデス、ダスも大部分に於て使はない。
- (七) 係助詞のコンは文語に近い。
- (八) 助詞のパンがある。

以上の結論として、「九州は明かに古代語の世界である」と結んで居る。しかし、こゝに言ふ古代語は室町時代語の意味である。従つて、室町時代まで溯れば、右に挙げた九州方言の特色は大部分消えてしまふ。つまり、九州方言の特色といふのは、三百年この方に生れた、新しいものである。橋本博士

は、史的立場に立つて、次の様に言つて居られる。

古代に於ては東西兩部方言の差異は九州方言と本州方言との差異に比して遂に顯著であつて九州方言は西部方言中の一部分と見た方が適當ではあるまいかと想はれる。室町時代に至つては九州方言と上方の方言との間にかなり著しい相違があつたのであるが、それでも東國方言に對してみればこの兩方言の間に多くの共通點を有つてゐたものと想はれる。……然るに室町時代以後本州方言に於てジとヂ、ズとヅの區別がなくなり、二段活用が一段に變化した爲、九州方言が日本の方言區劃上、獨自の地位を要求するにいたつたのである。(民族、二の四)

東條さんは、これに對して、「この史的考察については恐く誰も異論はあるまい、要は現代の方言の實際に基いて見た時九州方言の位置はどうなるかと云ふ點に歸着し橋本氏も之については意見を述べて居ない」と言つて居る(岩波講座、日本文學)

吉町義雄さんは、古代語については、九州方言を西部方言の一部分と見做す橋本説に賛成し、現代語については、東條説に賛成して居る(國語科學講座、九州の方言、古代の方言區劃については、三人とも意見が一致して居るから、問題は無い。問題は現代の方言にある。現代の九州方言は確に特異なものである。しかし、同じ程度の特異は東北方言にもある。九州方言を本州方言に對立させる事が

出来るならば、東北方言を殘の西南方言に對立させる事も出来る理窟ではあるまいか。たゞ、九州方言には歴史的背景がある。九州の現代の文法は、京都の室町時代の文法に近い。そして、慶長・元和の頃を境として、國語史を古代と近世とに二分する説が國語學者に認められて居るので、この分類を平面に應用したのが東條さんの方言區劃である。即ち、東條説には、歴史的背景がその支柱を成して居る。この支柱を取り去る事はひいきの引き倒しである。東條説は、純粹に現代の言語事實からばかり來たのではない。多少でも、古代の言語事實と關係があるとすれば、橋本博士の批評は大いに傾倒する價值がある。しかし、この三百年間に起つた變化も小さいものではない。現在の方言を見ると、九州方言を西部方言の一部とするのは無理がある。九州には獨特の方言が多い。だから、結局、次の様に並べるがいと思ふ。

本州東部方言

内地方言 本州西部方言

九州方言

### 第三節 アクセントの方言區劃

服部四郎さんによれば、東海道に於けるアクセントの境界線は埴斐川に沿うて居る。これから東を東方アクセントとし、これから西を西方アクセントとする。たゞし、大垣市は東方アクセントに属する。つまり、アクセント境界線は、大垣市と美濃垂井町との間を通り、桑名に至るものである。そして、この境界線の東西に於けるアクセントの推移は漸進的のものではなく、川一つを隔てると一變する性質のものである。例へば、桑名と對岸の長島（伊勢桑名郡）のアクセントは次の通りである。

長島	アト	イキ	ウミ	カサ	シル	マツ
跡	息	海	傘	汗	松	
桑名	アト	イキ	ウミ	カサ	シル	マツ
長島	アキ	アメ	オケ	コト	ハル	ムコ
桑名	秋	雨	桶	琴	春	婿
長島	アシ	イヌ	オヤ	ウタ	エリ	ナミ
桑名	足	犬	親	歌	襟	波
アシ	イヌ	オヤ	ウタ	エリ	ナミ	

長島	アル	カク	サス	タツ	ノム	ヨム
有	書	指	立	飲	讀	
桑名	アル	カク	サス	タツ	ノム	ヨム

右の長島の代りに東京とし、桑名の代りに近畿としても全く同じ事である。さて、四國は近畿系であり、山陽道は東方系である。服部さんは、近畿と四國とを中種アクセントと名づけ、東方と山陽道とを乙種アクセントと名づけた。また、大和吉野郡十津川には東方アクセントが行はれ、土佐幡多郡のアクセントも東京に近いと言はれて居る。九州のアクセントは特殊のもので、その詳細は不明であるが、東北、特に、青森・盛岡のものは大體、東方アクセントと大同小異のものであるらしい。例へば、前にあげた二字の名詞についてみるに、コト（琴）とムコ（婿）の二語を除く外は、盛岡のアクセントは、東京や長島のと全く同じである。（コト、ムコは近畿式）

東京文理科大学の大原孝道氏は、服部四郎氏とは獨立に調査して、次の結論を得た。近畿アクセントの境界は、東は愛知・三重の縣境から、大垣市・垂井町の間を通り、西は播磨と備前・美作との國境を通る。四國の海岸部は大部分、近畿と共通である。中國アクセントの領域は、中國地方全部、但馬全部・丹後の一部（熊野郡・竹野郡・中郡）それから小倉市・大分市に及ぶ。中國アクセントは東

京阿克セントと同系で、近畿のそれとは異なる。出雲は、大きな目で見れば中國阿克セントに屬するが、部分的には近畿阿克セントに近いものもある。

瀬戸内海の島々の阿克セントについては、藤原與一氏の調査がある。大體、服部・大原兩氏の説を裏書するものである。